

徳島大学教養部紀要

(人文・社会科学)

第二十二巻 別刷

1987

「ニーベルンゲンの歌」と「平家物語」における
悲劇の英雄像

石 川 栄 作

「ニーベルンゲンの歌」と「平家物語」における 悲劇の英雄像

石川 栄 作

Tragische Helden
in Nibelungenlied und Heikemonogatari

Eisaku ISHIKAWA

Zusammenfassung

Die Anziehungskraft von *Nibelungenlied* und *Heikemonogatari*, gemeinsam das Thema „Verfall“ habend, besteht darin, wie jeder Held im Verlauf des Untergangs sein eigenes Schicksal durchführt. Hier möchten wir die tragischen Situationen der Hauptpersonen in den beiden Werken beobachten, um den literarischen Unterschied klarzumachen.

Der in Sagen überlieferte Held Sivrit, *des hordes herre*, ist in *Nibelungenlied* auch als ein höfischer Ritter geschildert, der sich um die *høhe minne* bemüht. Die Werbung um die *høhe minne* verursacht aber später den Tod des sagenhaften Helden. In Sivrits Bild verschmelzen also das alt-germanische und das höfisch-ritterliche Moment. In der Herrschaft des alt-germanischen Schicksals stirbt der höfische Ritter, dessen Tragödie in seiner *triuwe* besteht.

Der historisch existierende Herr Kiyomori ist dagegen in *Heikemonogatari* als ein schlechter Herrscher erdichtet, der Anlaß zu Heikes Verfall gibt. Der Böse, in aller Pracht und Herrlichkeit, muß wegen der Hochmütigkeit am Ende schmerzlich sterben. In Kiyomoris Tod, einen Kontrast zu dem seines Sohnes Shigemori bildend, ist aber energischer Aktivismus mit starkem Willen zu erkennen, der das Zeichen des beginnenden Mittelalters zeigt.

Hagene, treuer Vasall des Burgondenlands, ist immer ein unentwegter Held, der übermenschlich gegen sein Schicksal kämpft, ohne sich vor dem verhängnisvollen Untergang zu fürchten. Die unbeugsame Kraft des germanisch-heldenhaften Mannes beweist am stärksten die letzte Szene, wo er, wie erwartet, seinen Herrn Gunther töten läßt. Er stirbt damit in höchstgewahrter Ehre.

Yoshinaka, eigentlich tapferer Kämpfer, ist, in Kyoto eingekommen, als ein barbarischer Mann ausgelacht, der sich das adlige Leben nicht gewöhnt. Sein wilder Tun verursacht seine Tragödie. In dem letzten Kampf ist er aber wieder ein mütiger Feldherr, der heldisch und ehrlich mit seinem freundlichen Vasallen Kanehira, menschliche Schwäche und Schönheit zeigend, das verhängnisvolle Schicksal bis zum Tod durchführt.

Yoshitsune, dem schicksalhaften Yoshinaka ähnlich, ist zuerst als ein im Kampf geschickter Held gelobt. Die Eigenschaft seiner Taktik besteht in dem flinken Überfall, der in Ichinotani-, Yashima- und Dannoura-Kampf zu finden ist. Er ist aber kein gefassener Politiker, sondern nur ein energischer Kämpfer, der selbst heldisch und ehrlich ins Schlachtfeld rückt. Es fehlt ihm, wie Yoshinaka, an politisches Vermögen. Deshalb muß er, in aller Pracht und Herrlichkeit, endlich zugrunde gehen. Dieses unbeständige Schicksal ist den drei Männern in *Heikemonogatari* gemeinsam.

Die tragischen Bilder derer, die wir hier behandeln, beweisen nun den Unterschied zwischen den beiden Werken: *Nibelungenlied*, sagenhaft und übermenschlich, preist den alt-germanischen Heroismus, der in der höfisch-ritterlichen Welt entwickelt ist, während *Heikemonogatari*, historisch und menschlich, die Unbeständigkeit erzählt, die in Schicksal von Kiyomori, Yoshinaka und Yoshitsune zu erkennen ist.

序

ドイツ中世の英雄叙事詩として「ニーベルンゲンの歌」が成立した頃、日本では「平家物語」が成立した。「ニーベルンゲンの歌」は、最初に古代ゲルマンの伝説があり、やがてそれが歌謡として歌われ、のちに叙事詩の形式で13世紀初頭に成立した¹⁾ものである。一方「平家物語」も、源平合戦を素材として琵琶法師が語り伝えたもので、その原形は中世の初期、1221年のいわゆる承久の乱以前に成立した²⁾ものだと言われている。このように両者とも語りものとして成立した関係上、必然的に異本・写本が多く生じている点でも共通している。「ニーベルンゲンの歌」には完本・断片を合わせると三十数種類もの写本が発見されていると言われている³⁾。これら多数残存している写本のうち、叙事詩の最後の語句が「ニベルンク族の災い」(der Nibelunc nôt)となっているものと「ニベルンク族の歌」(der Nibelunc liet)となっているものがある。一般に前者を nôt 本と呼び、後者を liet 本と呼んでいるが、最も原典に忠実な写本は nôt 本群の中にあることが W. ブラウネの研究⁴⁾以来一般に認められ、ザンクト・ガレン本の写本 B が今日では代表的な定本であるとされている⁵⁾。そして liet 本の写本 C の方は——それが直接写本 B から派生したものであれ、あるいは現存しない写本から生じたものであれ、いずれにしても——入念に企てられた改作である⁶⁾ことが一般に認められている。一方、「平家物語」にも多くの諸本が伝えられているのは周知の通りであるが、石母田正氏の分類方法⁷⁾に従えば、その伝本は大きく三種類に区別することができよう。まずその第一は、灌頂の巻を立てない諸本で、八坂本などがそれである。第二は、灌頂の巻を立てた諸本で、覚一別本も米沢本もこの系統のものである。第三は、増補された「平家物語」であって、二十巻の長門本、六巻の延慶本、四十八巻の「源平盛衰記」などがそれである。このように二作品とも非常に多くの異本が生まれているので、それぞれが原初的にいつどこで誰によってどのようにして成ったものか、いわば原「ニーベルンゲン」あるいは原「平家」はどのような形態を示していたかという問題については、今日なお課題が多く残されていると言わなければならない。

- 1) その生成史に関しては、アンドレアス・ホイスラーの研究が画期的なものであると言えよう。Vgl. Andreas HEUSLER: Nibelungensage und Nibelungenlied, Verlag von Fr. Wilh. Ruhfus, Dortmund 1921.
- 2) 「平家物語」の原作者に関しては、種々の推定が行なわれているが、どの研究においてもまず引用されるのが吉田兼好「徒然草」(1300年頃)第226段である。それによると、後鳥羽院の時代(1183-1221)に信濃前司行長が平家物語を作って、生仏という盲人に教えて語らせたというのである。この原作者の詮索はさておき、これは語りものとしての「平家物語」を考える場合には、示唆に富む説であると言えよう。
- 3) Vgl. Friedrich PANZER: Das Nibelungenlied — Entstehung und Gestalt, W. Kohlhammer Stuttgart 1955. S. 64-73.
- 4) Wilhelm BRAUNE: Die Handschriftenverhältnisse des Nibelungenliedes, Beitr. 25, 1900.
- 5) Friedrich PANZER: a.a.O., S. 73.
- 6) Vgl. Werner HOFFMANN: Die Fassung C des Nibelungenliedes und die Klage, In: Festschrift Gottfried WEDER, 1967. S. 109.
- 7) 石母田正: 平家物語 岩波書店(岩波新書)1957年、213-214頁。

ただ本稿で共通に問題として取り上げたいのは、そのような成立事情ではなく、それぞれの作品が持つ内容そのものである。この二作品の内容についてまず共通に認められることは、いずれも一族の滅亡をテーマにした作品であるということであろう。「ニーベルンゲンの歌」では、前編で暗殺されたジーフリトの死が原因となって、後編でブルゴント族が全滅してしまうのであり、また「平家物語」でも清盛の悪行がたたって清盛が病死してしまうや、義仲・義経の進撃で平家一門が全滅してしまうのである。確かに悲劇の原因・性格は異なるが、しかし、このように二作品とも一族の滅亡に通じているという点では共通しており、二作品の本質的な魅力は、その滅亡の過程の中で登場人物たちがそれぞれに与えられた運命としての性格を生き抜いているという点にあるのである。そこで本稿では、二作品における主要人物としてジーフリト・ハゲネ・清盛・義仲・義経の五名を取り上げて、その悲劇の中で彼らはいかに滅びたか、言い換えれば、彼らは死すべき人間としていかに生きたか、その悲劇的状况を考察し、それによって両作品の文学的特質を明らかにすることにでもなれば幸いである。

1. ジーフリト像 ——古代ゲルマン的英雄像と宮廷的騎士像——

まず「ニーベルンゲンの歌」前編において無くてはならない人物であるニーデルラントの英雄ジーフリトは、伝説上の古代ゲルマンの英雄として伝承されていることを指摘しておかねばなるまい。その古代ゲルマンの英雄としてのジーフリト像は、この叙事詩ではハゲネの語る冒険譚(86-101詩節)から容易に読み取られよう。それによると、このニーデルラントの英雄ジーフリトは、とある山の麓でニーベルンゲンの宝を前にして大男シルブクとニベルクが口論しているところに出くわしたのである。シルブクとニベルクは快くこの英雄ジーフリトを迎えて財宝の分配の役目を依頼したのであるが、このジーフリトの分配方法は、二人にとっては不満を生む結果となり、二人は腹を立ててしまったのである。ジーフリトの方も勿論怒って、結局争いとなり、ジーフリトはバルムクという名剣でこれらの男を打ち倒し、さらにニーベルンゲンの武士七百名をも征服してしまうのである。侏儒アルプリーヒは主君たちの復讐をしようと思いつが、逆にジーフリトの剛勇を思い知らされる結果となり、ジーフリトはこのアルプリーヒから隠れ蓑(tarnkappen, 97, 3)を奪い取ったのみならず、彼を宝物の見張り役にまで命じてしまい、ニーベルンゲンの宝の持ち主(des hordes herre, 97, 4)となったのである。さらにこの勇士ジーフリトは、ある日竜を退治したとき、その血を全身に浴びて、そのため肌が不死身の甲羅と化(hurnin, 100, 3)し、どんな武器も彼を傷つけ得ない英雄ともなったというのである。

ジーフリトはこのように竜の血を浴びて不死身の英雄となっているのである。不死身の英雄でありながら、しかし、ジーフリトは最後には死ななければならないのである。なぜなのであろうか。それは、一言で言えば、財宝の霊の力による死である。ジーフリトはニーベルンゲン族を打ち倒し、侏儒アルプリーヒからは隠れ蓑をも奪い取って、ニーベルンゲン財宝のことがとくを所有してしまった(97, 4)がゆえに、最後には死ななければならないのである。その財宝の一つで

ある隠れ蓑 (Tarnkappe) は、吉村貞司氏によっても以前から指摘されている⁸⁾ ように、「秘密な」(tarn)——中世ドイツ語で「隠れる」(tarnen) から出た形容詞——「オーバー」(kappe = mantel) という意味であり、そのオーバーを着れば、姿が見えなくなるという魔法の宝物である。ジーフリトは事実のちにこの隠れ蓑を身につけて二度にわたって秘策を実行したがために、ついにはハゲネに殺害されてしまう運命にあったのである。暗殺後宝庫の番人アルプリーヒはそのことを明らかに語っているのである。

《Nu ist ez Sifride leider übel komen,
daz unz die tarnkappen het der helt benomen
unt daz im muose dienen allez ditze lant.》(1120, 1-3)

「ところが、あの勇士が我々から隠れ蓑を奪いとり、
この国全土があの方の支配するところとなったということが、
結局あの方の不幸を招くこととなったのだ。」

隠れ蓑が「ニーベルンゲンの歌」の作者の創作である⁹⁾ にしても、ジーフリトの死にはともかくニーベルンゲン財宝の霊の力が働いていたことが明らかである。「ニーベルンゲン」(Nibelungen) とは暗黒を意味し、ニーベルンゲンの宝を持つ者は滅びなければならないのである¹⁰⁾。ジーフリトはニーベルンゲンの宝の所有者となり、ニーベルンゲン国の主人となったがために、滅びなければならなかった運命にあったと言えるのである。ここには古代ゲルマンに由来するニーベルンゲン伝説の不思議な力が作用しているのであり、前編の主人公ともいべきジーフリトは最初から死すべき運命にある古代ゲルマンの英雄として登場しているのである。

この英雄ジーフリトは、しかし、この叙事詩においては古代ゲルマンの英雄と同時に、また一方では気高い乙女の愛 (høhe minne, 47, 1) を求める中世の騎士としても描かれていると言わなければならない。高きミンネ (høhe minne) と呼ばれるこの気高い乙女への愛の本質は、要するに貴婦人の愛を得るために騎士は武技を磨くとともに内面的浄化をもはかることにある。ジーフリトもまさにこの高きミンネを求めて武技と心を磨く理想の中世騎士としても描かれているのである。ただこの叙事詩においてはこの中世騎士のミンネこそそのちに悲劇の原因となり、その愛の歓び (liebe) も結局は悲しみ (leide) に終わってしまうものとして取り扱われているのである。ジーフリトがこのミンネのために死すべき気高い殿御 (ein edel man, 14, 3) であったということは、この作品の冒頭に語られている「クリエムヒルトの夢」(第一歌章) からもすでに明らかである。それによると、クリエムヒルトは、ある日のこと、彼女が飼っていた強い、美しい、猛しい鷹が、二羽の鷹の爪に引き裂かれた夢を見たのである。鷹は中世にあっては愛人のシンボルともされていた¹¹⁾ が、クリエムヒルトからこの夢の内容を聞いた母君ウオテもそのことを明らかにしてい

8) 吉村貞司：ニーベルンゲン伝説 鎌倉書房 1943年、41頁。

9) 吉村貞司：ゲルマン神話—ニーベルンゲンからリルケまで— 読売新聞社 1972年、121-2頁。

10) 吉村貞司：ニーベルンゲン伝説、38-9頁。

11) 同上書、38頁。

る。

《der valke, den du ziuhest, daz ist ein edel man.
in welle got behüeten, du muost in sciere vloren hân.》(14, 3-4)

「そなたが飼っていた鷹というのは気高い殿御のことじゃ。
運が悪いと、そなたは殿御をじきに失わねばなるまい。」

この夢占いを聞いたクリエムヒルトは、殿御の愛 (mannes minne, 15, 4) のために災い (nôt, 15, 4) など受けないように、殿御の愛 (recken minne, 15, 2) を断念してこう言うのである。

《Die rede lât belîben), sprach si, 《frouwe mîn.
ez ist an manegen wîben vil dicke worden scîn,
wie liebe mit leide ze jungest lônén kan.
ich sol si mîden beide, sone kan mir nimmer missegân.》(17)

「そんな話はおやめになって。」 姫がさえぎった。
「母上様。恋のよろこびが結局かなしみをもたらすということは、
もう、いろいろの女の例で、はっきりしているのですもの。
私は恋も悩みも両方捨てますから、悪い事も起こりますまい。」

こうして、いとしと思うような殿御をも知ることなしに、この優しい姫は長い年月、たのしい日々を送りむかえたのであるが、しかし、やがて彼女も、晴れて或る勇士の妻となる日がきたのである (18, 3-4)。

Der was der selbe valke, den si in ir troume sach,
den ir besciet ir muoter. wie sêre si daz rach
an ir nâhesten mâgen, die in sluogen sint!
durch sîn eines sterben starp vil maneger muoter kint. (19)

この勇士こそ、姫が夢にみて、母君が占ったあの鷹であったのだ。
後にこの勇士を殺害した自分の近親の人々に、
彼女はどれほどひどい復讐を遂げたことであつたろうか。
この一人の死のために幾多の母の子らは命を失ったのだ。

このクリエムヒルトの夫となる勇士こそジーフリトを暗示していることは明らかであり、このときすでに英雄ジーフリトは、クリエムヒルトのミンネを求める限り、死ぬ運命にあったと言わなければならないのである。中世的なミンネもここでは古代ゲルマン的運命観の支配下にあるのである。従って、ここには古代ゲルマン的な要素と中世騎士的な要素とが見事に溶け合い、重なり合っていると見えよう。ここに「ニーベルンゲンの歌」は宮廷叙事詩ではなく、英雄叙事詩と呼ばれる独特な性質も存在するのである。

この古代ゲルマン的なものと中世騎士的なものとの融合は、以後のあらすじの中にも認められ、

あらすじはことごとく古代ゲルマン伝説のモチーフと中世騎士のモチーフとが織りなす独特の世界の中で展開してゆくとと言っても過言ではないであろう。不死身の英雄ジーフリトは同時に triuwe (誠実) を持ち合わせた中世騎士の理想像として形象化されているのである。ザクセン勢とデンマルク勢とが再度戦いを挑んでいるという嘘報を耳にしたときも、ハゲネによる策略だと知らずに、ジーフリトは中世の騎士らしく援助を申し出たわけであるが、この中世騎士の triuwe の徳目が逆に悪用されることとなるのである。戦いも中止となって狩りに出かけることになったとき、クリエムヒルトはハゲネに打ち明けた話——彼女はハゲネが信実を尽くしてくれることを信じて、いとしい夫の急所を教えていた (899-902) ののである——を思い出し、夫のジーフリトに狩りに行くのを止めるよう警告するが、そのときもジーフリトは相変わらず一族の者たちを信頼しきった誠実な中世の騎士なのである。

Si sprach zuo dem recken: 《lât iuwer jagen sîn.
mir troumte hînte leide, wie iuch zwei wildiu swîn
jageten über heide, dâ wurden bluomen rôt.
daz ich sô sêre weine, des gêt mir wærfliche nôt. (921)

Ich fürhte harte sêre etelîchen rât,
ob man der deheinem missedienet hât,
die uns gefüegen kunnen vientîchen haz.
belîbet, lieber herre: mit triuwen rât' ich iu daz.》 (922)

Er sprach: 《mîn triutinne, ich kum in kurzen tagen.
ine weiz hie niht der liute, die mir iht hazzes tragen.
alle dîne mâge sint mir gemeine holt,
ouch hân ich an den degenen hie niht anders versolt.》 (923)

《Neinâ, herre Sîfrit! jâ fürht ich dînen val.
mir troumte hînte leide, wie ob dir zetal
vielen zwêne berge: ine gesach dich nimmer mê.
wîl du von mir scheiden, daz tuot mir an dem herzen wê.》 (924)

彼女は勇士にいった、「狩りはお止めなさいまし。
昨夜、私は二ひきの猪が、野原であなたを追いかけている
いやな夢をみました。草花が朱に染まったのです。
私がこんなに泣くというのも、わけのないことはありませんもの。

私たちに敵意を抱きかねないような人たちの中の、
だれかの感情をそこねてでもいたとすると、そういう人が
何か悪企みでもしやしないかと、それがとても気にかかるのです。
行かないで下さいまし、真心をもってお留めいたします。」

彼がいった、「かわいい妃よ、わしは日ならずして帰ってくる。

当地でわしに対して敵意を抱くような人たちがいるとは思わぬ。
そなたの親戚はみなわしに好意をもっている。
わしとて勇士たちから悪い報いをうけるはずはない。」

「いいえ、ジーフリト様、私はあなたが最期を遂げられるのが怖いのです。
昨夜、私は二つの山があなたの上に崩れかかる厭な夢をみました。
もうあなたの姿が見えないのです。
別れてゆかれるのが、心から悲しくてなりません。」

このように不吉な夢に基づく妻の忠告にもかかわらず一族を信頼しきって狩りに出かけてゆくジーフリトは、中世騎士の理想像と同時に、運命の力に導かれて破滅へと向かって進んでゆく古代ゲルマン的英雄像をも描出していると言うことができるであろう。ジーフリトはともかく中世の理想の騎士らしく一族を信頼しきったままついに古代ゲルマン的な運命の待つ狩りへと出かけてゆくのである。確かにジーフリトは悲劇的結末の運命を悟ってはいないのであるが、古代ゲルマン的精神がジーフリトをその運命に向かって突き進ませるのである。否、運命を自分自身は悟っていないところに、ジーフリト悲劇の特質があると言えよう。言い換えれば、ジーフリトの悲劇性はその中世的な *triuwe* の中にこそあるのである。暗殺の場面でも彼のこの作法正しさが悪用される (980, 1) ののである。すなわち、狩りが終わって、泉まで競争して一番にジーフリトが泉に着いたときも、ジーフリトはきわめて作法正しい勇士 (978, 1) であり、彼は泉の流れるほとりに楯をおき、のどの渇きははげしかったけれど、国王の飲むまでは決して水を飲もうとはしなかった (978, 2-4)。しかるに国王は彼にひどい報い方をしたのである。すなわち、グテル王の飲んだあとで泉の水を飲もうとしたところを、ハゲネが十字の印——夫の急所を護ってくれるものと信じて、クリエムヒルトは衣装の上に十字の印を縫いつけておいたのである——をめがけて槍で突き刺すのである。ジーフリトの *triuwe* もクリエムヒルトの *triuwe* も、逆手に取られてしまったのである。*triuwe* が悪用されたということは、瀕死の手傷を負ったジーフリト自身の口からも明確に聞かれるのである。

Dô sprach verchwunde: 《jâ ir vil boesen zagen,
was helfent miniu dienste daz ir mich habet erslagen?
ich was iu ie getriuwe: des ich engolten hân.
ir habt an iuwern mâgen leider übele getân.》 (989)

瀕死の手傷を負った勇士はいった、「心のまがった卑怯者、
こんなにして殺されるようでは、わしの日頃の心尽くしは
なんの役に立ったか。わしの誠実がこんな報いをうけるとは。
おん身らは遺憾にも一族の名折れとなる所業をしでかした。」

信実のころ (triuwe) を有する者は、彼を悼み嘆いたが、実にこの天晴れな勇士は、それに値したのである (991, 3-4) と作者自身も語っているように、要するに、ジーフリトは *triuwe* のま

ま滅んでいったのであり、ジーフリトは暗殺されるにあたって、ブルゴント一族とは正反対に、中世騎士の徳目の一つである誠実 (triuwe) を持ち合わせたきわめて理想的な騎士に創り上げられているのである。ジーフリトが立派な騎士であればあるほど、その死の悲劇性も高まってくるからである。このように古代ゲルマン的宿命観を背景にして、中世騎士の理想像が展開され、独特な中世的世界を創り上げているところに、この作品の特質があると言えるのである。

2. 清盛像 ——古代と中世の混血児——

このように「ニーベルンゲンの歌」におけるジーフリトは完全無欠の英雄として誠実のまま滅んでゆく人物として描かれているわけであるが、一方「平家物語」における平清盛の方はどうか。『平家物語』における清盛の人間像については、序章とも言うべきあの有名な「祇園精舎」の章段においてすでに明確に打ち出されていると言えよう。

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。婆羅雙樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。(巻第一「祇園精舎」)

(祇園精舎の鐘の響は、万物流転のつねならぬ世の様をつたえ、白じろと散る婆羅雙樹の花の姿は、栄える者のかならず滅びゆく道理をつける。権におごる者の運命は、春の夜の夢のようにはなく、武に強い人の身の上もまた、ついには消えうせること、ひとえに風に吹き飛ぶ塵のようなものだ。)

この「祇園精舎」の冒頭で奏でられている諸行無常・盛者必衰の理から、清盛を中心にする平家一門も栄華ののちにはついに滅びてしまうことが暗示されていると言えるわけであるが、この哀調をおびた無常観がただよう中で、清盛はしかも一門の滅びゆく原因を作った張本人として全くの悪役に創り上げられ語られているのである。すなわち、

遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の周伊、唐の祿山、是等は皆舊主先皇の政にもしたがわず、たのしみをきはめ、諫をもおもひいれず、天下のみだれむ事をさとらずして、民間の愁る所をしらざりしかば、久からずして亡じし者ども也。近く本朝をうかがふに承平の將門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、比等はおごれる心もたけき事も皆とりどりにこそありしかども、まぢかくは六波羅の入道、前太政大臣平朝臣清盛公と申し人のありさま、傳へうけたまはるこそ心も詞も及ばれぬ。(巻第一「祇園精舎」)

(これを異国の遠い昔にたとえをひけば、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱異(周伊)、唐の安祿山、いずれも旧主先皇の政道にたがい、快樂をきわめ、人のいさめにも耳をかさず、天下の乱兆を悟らず、庶民の憂苦にも心およばなかったため、たちまちにして滅びさった。近くはわが国でも、承平の平將門、天慶の藤原純友、康和の源義親、平治の藤原信頼など、その驕慢、強猛、人に過ぎるものがあつたが、ことにも六波羅の入道、前太政大臣、平朝臣清盛公とよばれた人にいたっては、そのありさまことに想像を

こえ、形容の言葉もおよばぬばかりである。)

「平家物語」における清盛の位置づけは、ここですでに明らかである。すなわち、保元の乱と平治の乱をきっかけにして、たちまちのうちに昇進していった、ついには最高の太政大臣の位にまでたどり着いた清盛は、その栄華の中で「おごり」をきわめ、「驕慢、強猛、人に過ぎるものがあった」がために、その因果として、ついには滅びてゆかざるを得ない悪逆無道の専横者として位置づけられているのである。この「形容の言葉もおよばぬ」横暴者として位置づけられた清盛像は、その後のあらすじを貫いて展開されているわけであるが、逆にその嫡子重盛は全くの理想の人物として描かれていると言えよう。否、例えば巻第一「殿下乗合」の章段では史実をあえて歪曲してまでも¹²⁾、重盛は温厚な人物として創り上げられているのである。その虚構の理由は、——例えば山田昭全氏などによってもすでに指摘されているように——清盛の悪業をきわ立たせるためには重盛は善人でなければならないからである¹³⁾。明らかに重盛は「平家物語」においては清盛に対置された人物だ¹⁴⁾と言えるのであり、清盛が王法と仏法にそむくほどの暴挙を働いているならば、重盛はそれらを擁護する立場にあるのである。鹿谷の陰謀の陰の大物後白河法皇を清盛が幽閉しようとしたのを、思いとどまらせたのもこの重盛である¹⁵⁾。「平家物語」で善人として創作された重盛は、入道の身でありながら鎧を身に着け並々ならぬ気色で法住寺殿へ攻め向かおうとする清盛を諫めて、あの有名な教訓を長々と述べるのである。

「此仰承候に、御運は早末に成ぬと覺候。人の運命の傾んとては、必悪事を
 思立候也。又御有様、更現共覺候はず。(中略) 旁々恐ある申事にて候へども、
 心の底に旨趣を遺すべきに非ず。先世に四恩あり。天地の恩、國王の恩、父母の恩、
 衆生の恩是也。其中に最重きは朝恩也。(中略) 何に況、先祖にも未聞ざし
 太政大臣を極めさせ給ふ。所謂重盛が無才愚闇の身をもて、蓮府槐門の位に至る。
 加之國郡半過一門の所領と成、田園悉く一家の進止たり。是希代の朝恩に
 非ずや。今是等の莫大の御恩を思召忘れて、猥しく法皇を傾け参らせ給はん
 事、天照大神、正八幡宮の神慮にも背候ひなんず。日本は是神國也。神は非禮を
 受給はず。然れば君の思召立ところ、道理半無に非ず。」 (巻第二「教訓状」)

- 12) 「平家物語」巻第一「殿下乗合」の章段が語るところによると、重盛の次男資盛(清盛の孫)が鷹狩からの帰途、摂政藤原基房の行列と出会った際、下馬の礼をとらなかつたため、資盛一行は馬から引きずり下されるという恥辱を与えられたのであるが、清盛はこれを聞いて怒り、数日後三百騎あまりの部下に命じて基房の行列を待ちぶせさせて、一度に襲いかかって一人一人の髻をみな切り落とさせたということである。しかし、九条兼実の日記「玉葉」などの確実な記録によると、基房に対する報復を命じたのは清盛ではなく、重盛であったということである。(上横手雅敬：平家物語の虚構と真実(上) 塙新書 1985年、90-1頁参照。)
- 13) 山田昭全：平家物語の人びと 新人物往来社 1972年、55頁。
- 14) 同上書、54頁。
- 15) ちなみに、清盛が法皇幽閉を決意し、重盛に諫止されたことも物語の虚構である。(上横手雅敬：前掲書(上)、51頁参照。)

(「ただいまの仰せを承れば、御運もはや末かと思われました。人の運命の傾くときは、かならず悪事を思い立つもの。また御様子を拝見するに、まことに正気の沙汰とは思われませぬ。(中略) 子としておそれ多い申し分ではありますが、思うことを心に隠しひそめておくわけには参りませぬ。まず、世に四恩というものがあります。天地の恩、国王の恩、父母の恩、衆生の恩を申します。なかでも、最も重いのが国王の恩とされております。(中略) まして父上は、先祖に前例なき太政大臣の高位をきわめ、重盛ごとき無才愚暗の身をもってすら、大臣の位に至りました。そればかりでなく、国郡の半ばは一門の所領となり、田地莊園はことごとくわが一家の配下にあります。これこそ世にまれな朝恩ではありませぬか。それをいま、この上なき大恩を忘れ、無法にも法皇をお攻めになろうとは、これこそ天照大神、正八幡宮の神慮にそむくことかと思われませぬ。そもそも日本は神国であります。神は非礼を受けたまわず、そう考えれば、法皇の思し立たれたことも、いちおうの理がないとは申せませぬ。)」

重盛がこのように説くとき、それは明らかに貴族社会の体制の軌範としての道義¹⁶⁾である。重盛は王朝的・貴族的な思想の代弁者として、その軌範に反逆する清盛の暴挙を諫止しようとしているのであり、重盛がこのように貴族社会の倫理を具現した人物として強調されればされるだけ、清盛は王法仏法に反逆する横暴な性格を際立たせる結果となっているのであって、この重盛の人間像は「平家物語」における清盛像を理解する上で必要不可欠なものであると言えよう。「教訓状」に続いて語られる「烽火之沙汰」の章段でも、皇室を擁護する重盛の態度はさらに展開されており、盲目的とさえ言える程である。

「是は君の御理にて候へば、叶はざらむまでも、院の御所法住寺殿を守護し参らせ候べし。其故は重盛叙爵より今大臣の大將に至迄、併ら君の御恩ならずと云ふ事なし。其恩の重き事を思へば、千顆萬顆の玉にも越え、其恩の深き事を案ずれば、一入再入の紅にも過たらん。(中略) 悲哉、君の御為に奉公の忠を致んとすれば、迷廬八萬の頂より猶高き父の恩忽に忘れんとす。痛哉、不幸の罪を遁れんとすれば、君の御為に已に不忠の逆臣と成ぬべし。進退惟谷れり。是非いかにも辨へ難し。申請る所詮は、唯重盛が頸を召され候へ。」

(巻第二「烽火之沙汰」)

(「このたびのこと、道理は法皇にあるものとぞんじますゆえ、かなわぬまでも、私は、法住寺殿を守護つかまつります。そのゆえは、重盛叙爵の初めより、今の大臣大將にのぼるまで、法皇の御恩でないものはありませぬ。この恩の重きを思えば、千万の珠玉にもまさり、その恩の深きこと色にたとえれば、染めかえしたる紅の濃さにも過ぐると申すもの。(中略) 悲しいかな、君のおんために奉公の忠をいたさんとすれば、須弥山の頂きよりもなお高き、父上の御恩をたちまちにして忘れなければなりませぬ。痛ましいかな、不幸の罪をのがれんとすれば、君のおんためには不忠の逆臣とならねばなりませぬ。進退ここにきまりました。いずれが是かいずれが非か、判断がつかかねます。この上はどうか、この重盛が首をはねたまえ。)」

16) 杉本圭三郎：軍記物語の世界 名著刊行会 1985年、31頁。

頼みにしている重盛が涙とともにこのようにかきくどくので、清盛も重盛と仲たがいは具合が悪いと思ったのか、法皇を幽閉させることは思いとどまったのである。後白河法皇もこの由を耳にすると、「今にはじめぬことがながら、内府（重盛）の心のうちを思えば、われながらはずかしい。仇^{あだ}を恩で報いられた」（巻第二「烽火之沙汰」）と語ったほどであり、このように皇室を擁護する重盛の態度は、「平家物語」では貴族の理想とされ、賞賛の的ともなっているのである。しかし、「悲しいかな、君のおんために奉公の忠をいたさんとすれば、須弥山の頂きよりもなお高き、父上の御恩をたちまちにして忘れなければなりませぬ。痛ましいかな、不幸の罪をのがれんとすれば、君のおんためには不忠の逆臣とならねばなりませぬ」と嘆く重盛の忠孝兼備の理想像は、12世紀後半の変革期においては単なる理想的な貴族の姿に過ぎず、現実的には何の役にも立たない無力な態度であることもほのめかされているのである。事実、のちには後白河法皇は清盛によって幽閉されることになるからである。清盛が古代的権威にも容赦なく反抗してゆく直情径行の人物であれば、重盛は反対に温和な人物として描かれているわけであるが、同時にこの重盛はもはや現実に対して何も成すことができない貴族性の衰退を意味しているとも言えるのである。

この重盛の無能な貴族性は、彼の最期の場面においてもはっきりと読みとることができよう。父清盛の悪逆無道ぶりを見るにつけ、未来に不安を覚えた重盛は、熊野へ参詣して浮世の望みを捨て、今はただ来世の救いを願い出るだけなのである。来世の救いを祈念して都へ帰ると、重盛はその参詣の前にすでに予感していたように、数日を経ないで病の床につくのである。ちょうどその頃宋から優れた名医が渡来していたので、清盛がその名医の治療をすすめると、重盛はこう言って、それを拒むのである。

「延喜の御門は、さばかの賢王にて渡せましましけれ共、異國の相人を都の中へ入させ給たりけるをば、末代迄も賢王の御誤、本朝の恥とこそ見えたれ。況や重盛程の凡人が、異國の醫師を王城へ入ん事、國の恥に非ずや。（中略）重盛 苟も九卿に列し、三台に昇る。その運命を計るに、もて天心に在り。何ぞ天心を察せずして、患に醫療を痛はしうせむや。若定業たらば、醫療を加ふ共益無からんか。又非業たらば、療治をくはへず共、助る事を得べし。（中略）若かの醫術に依て存命せば、本朝の醫道無に似たり。醫術効驗なくんば、面謁所詮なし。就中本朝鼎臣の外相を以て、異朝淨遊の來客に見ん事、且は國の恥、且は道の陵遲也。縦重盛命は亡ずといふ共、争か國の恥を思ふ心を存せざらん。此由を申せ。」

（巻第三「医師問答」）

（「延喜の帝は、あれほどの賢王でいらせられたが、異國の人相見を都にお入れになったことは、末代までも賢王の御誤り、本朝の恥であったと、物の本に書かれてある。いわんや重盛ほどの凡人が、異國の醫師を都に召し入れることは、まさしく國の恥ではあるまいか。（中略）かりそめにも重盛、公卿の座につらなり、大臣に昇るを得たのも、考えれば、すべて天意である。天意を察せずして、医療に骨を折ったとて何になろう。この病がもし前世より定められた業報であったとしたなれば、医療を加えたとてなんの益があろう。また業報でない

とすれば療治をせずとも助かるであろう。(中略) もしも宋医の医術によって命が助かったとすればわが国の医道は無きにひとしいことになろう。もし宋医すら、なおし得ないとすれば、会うことも無益だ。ことに日本の大臣の身をもって異朝流浪の来客にまみえることは、国の恥であり、政道の衰えを示すものである。たとえ重盛は一命を失うとも、いかでか国の恥を思う心のなかるうぞ。父入道にこの由を申せ)

重盛は自らの死をすでに悟っていたのであるが、その死と戦おうとする意志は全くなく、反対にその運命に従順な人間として描かれているのである。臨終にあっても少しも心を乱さず、ついに43歳という男ざかりの年齢で他界してしまうのである。

この重盛の最期と著しい対照を成すのが清盛の最期であると言えよう。重盛の死後は、もはや清盛の悪行を諫める者もなく、清盛の悪逆無道ぶりは、例えば高倉天皇を無理やり帝位からひきおろして、その代わりに自分の娘徳子(建礼門院)の子(安徳天皇)を天位につかせたり、また都を一時福原へ移したりして、王法仏法に反逆する清盛の悪行ぶりはまさに頂点に達するわけであるが、その後の清盛の病死はその悪行の報いとしてとらえられていると言えるのである。清盛の重態のうわさが聞こえると、都の人々は「そりゃこそ、悪行のむくい」とささやきあつたくらいなのである。清盛は、発病の日から、湯水も喉を通らず、身体の熱いことはまことに火でもたいているかのようにであったと語られている。石の水槽に水を入れて、清盛の身をそこに浸すと、水はたちまち沸き上がって、まもなく湯になつたくらいだとも言われているのである。清盛の正妻の二位殿が、清盛の命ももうそう長くないことを悟って、清盛の枕もとににじり寄って、遺言を催促するわけであるが、その清盛の遺言がまた恐ろしいものである。

「われ保元平治より以来、度々の朝敵を平げ、勸賞身に餘り、忝くも帝祖太政大臣に至り、榮花子孫に及ぶ。今生の望、一事も残る所なし。但し思置く事としては、伊豆國の流人前の兵衛の佐頼朝が頸を見ざりつるこそ安からね。我如何にも成なん後は堂塔をも立て孝養をもすべからず、やがて討手を遣し、頼朝が頸を刎て、我墓の前にかくべし。其ぞ孝養にて有んずる。」(卷第六「入道死去」)

(「保元、平治よりこのかた、たびたびの朝敵を平らげ、恩賞は身にあまり、かたじけなくも一天のおん君の御外戚として太政大臣にまで上り、榮華はすでに子孫にまでおよんだ。今生の望み、一事も思い残すことはない。ただ、兵衛佐頼朝の首を見なかったことが、なによりも無念である。われ亡きあとは仏事供養をもすべからず、堂塔をも建つべからず、即刻討つ手を下し、頼朝が首をはねて、わが墓の前にそなえよ。それが何よりの供養であろうぞ))

こうして清盛は悶絶の末ついに卒倒して、64歳の年齢で息を引きとるわけであるが、極熱の苦痛に堪えてわめきだされたこの清盛の遺言には、——永積安明氏の言葉をそのまま借りれば——清盛の犯したもろもろの罪業にたいするおそろべき責め苦にたいしても、一歩も退くことをしない強烈な意志と不屈の闘志、また何十万という武士団をひきいて、動乱時代を生きぬいて行った

旺盛な行動力が、あざやかに表現されているのである¹⁷⁾。死に直面しても、息子の重盛とは正反対に、死後も生きようとしているのであり、このような罪深い遺言を残して死んでいった清盛の最期の姿には、——上横手雅敬氏も指摘されているように——意志の時代である中世の登場が実感される¹⁸⁾と言えるのであり、貴族性と武士性とを合わせ持ち、古代と中世との混血児であった清盛はその終焉の場において、中世武人の根性を明白に示したのである¹⁹⁾。重盛の死が貴族性の衰退を象徴化しているとするならば、清盛の死はどちらかと言えば武士性の萌芽を象徴化しているということもできるのではあるまいか。「平家物語」の世界はまさにこの古代と中世の対立、葛藤の世界であり、貴族的世界と武士的世界の混血児とも言うべき清盛こそは、古代勢力と中世勢力との狭間で必然的に滅びてゆかざるをえなかった悲劇の人間であったと言えよう。清盛死後は、その遺言の通り、供仏供養のいとなみはいっさいなく、明けても暮れても、合戦の策をめぐらすばかりである。平家の栄華は清盛によって築き上げられ、平家の凋落も清盛によって行なわれたと言ってもよいであろう。清盛死後、平家は滅亡の一途をたどるばかりなのである。

以上見てきたことから言えることは、ジーフリトと清盛とは全く対照的であるということである。ジーフリトは完全無欠であったにもかかわらず、古代ゲルマン的宿命観によって殺害される運命にあったが、逆に清盛は欠点だらけで人々を殺害してゆき、その果てはその悪行の報いとして病死してしまうのである。死に方は異なっているにしても、ともかく二人の死は一族滅亡への大きなきっかけを与えていると言えるのである。ジーフリトと清盛はそれぞれの作品前半における主要人物であり、また全体の悲劇のテーマにとっても無くてはならない存在であると言えることができるであろう。

3. ハゲネ像 —— 擻猛な勇士 ——

このように「ニーベルンゲンの歌」全体にとってジーフリトは無くてはならない存在であるが、同様にブルゴント国の重臣ハゲネも無くてはならない人物である。このハゲネは一見不実な男のように見えるが、しかしよく考えてみれば、ハゲネこそは全編を通じて忠誠 (triuwe) の権化だとも言えなくはない。すなわち、前編ではグンテル王に忠実であり、後編では自己に忠実なのである。このハゲネの行動は忠誠 (triuwe) で統一されるが、ハゲネの内面に注目すると、前編と後編とでは著しいコントラストを成していることがわかる。

まず前編ではハゲネの意志通りにあらずじが展開していると言える。ジーフリトがウォルムスの町に初めて姿を現わしたとき、ジーフリトについて語り、丁重に出迎えるように忠告したのはハゲネである。ハゲネの忠告通り、ジーフリトはブルゴントの国で丁重に出迎えられ、そこでしばらく暮すことになるが、その後グンテル王がイースラントの国に旅立つにあたって、ジーフリ

17) 永積安明：平家物語を読む 岩波書店（岩波ジュニア新書）1980年、108-9頁。

18) 上横手雅敬：前掲書（下）、67-8頁。

19) 同上書、68頁。

トの援助をすすめたのもハゲネなのである。さらにはジーフリト暗殺を企て、国王たちを説得したのもこのハゲネなのである。そして財宝をライン河に沈めてしまったのもハゲネなのである。全てがハゲネの意志通りに動いていると言えよう。

ところが後編になると、最初は全てがハゲネの意見とは、反対のことが起こる。まずクリエムヒルトの再婚の話がもたらされたとき、その使者について語ったのはハゲネで、ハゲネはその再婚に反対したのであるが、しかし、グンテル王たちはクリエムヒルトの決心にまかせることになり、結局は再婚が実現してしまうのである。結婚後、饗宴に招待されたときも、ハゲネは反対するが、それとは反対に国王たちは招待に応じてしまうのである。前編とは著しいコントラストを示していると言えよう。しかし、国王兄弟に臆病だとののしられて (1462-3; vgl. 1512) からは、ハゲネは自らを貫き通し、招待の旅についてゆくことを決心する (1464) ののである。国王兄弟の母ウオテが不吉な夢 (1509) を見て、旅を思いとどまらせようとしたのに対して、ハゲネは今や以前とは反対に旅をすすめさえするのである。

《Swer sich an troume wendet》, sprach dô Hagene,
 《der enweiz der rechten mære niht ze sagene,
 wenn' ez im ze êren volleclichen stê.
 ich wil, daz mîn herre ze hove nâch urloube gê. (1510)

Wir suln gerne rîten in Etzelen lant.
 dâ mac wol dienen kûnegen guoter helde hant,
 dâ wir dâ schouwen müezen Kriemhilde hôhgezît.》
 Hagen riet die reise, iedoch gerouw ez in sit. (1511)

「夢などを信ずる人は、」そのときハゲネがいった、
 「自分の誉れが申しぶんなく広まっているのに、
 分別を失って迷ってばかりいる者なのです。わが主君には、
 ご婦人たちのところに参られて暇乞いをなさるようにお勧め申したい。

私どもは勇んでエッツェルの国に参りましょう。
 そしてクリエムヒルト殿にまのあたり接する折りには、
 勇ましい武士たちが王様がたのお役に立つでしょう。」
 ハゲネは旅を勧めたが、後に彼にとって悲しいこととはなったのである。

この旅立ちの決意でもってハゲネは本来の自分に立ち戻ったと言えるのである。こうして不吉な夢をも恐れず困難に向かって進んでゆくハゲネの勇壮たる姿は、一見、ジーフリトの——あのクリエムヒルトの不吉な夢にも拘らず策略の戦闘へと勇敢に出かけてゆく姿によく似ている。しかし、ハゲネの姿がジーフリトと異なっている点は、ハゲネは自らの破滅を自覚しているということである。成程ジーフリトは結局は死ぬことにはなるが、しかし旅立ちの際その死を認識していたわけではない。それに対してハゲネは破滅をしかと認識していたことは疑いがない。彼が武

装をして旅立つようにと忠告した(1471, 3-4)のも、まさにその死の認識のためである。その滅亡の認識が最も明白となるのは、旅路の途中でドーナウ河を渡るときである。ドーナウ河が氾濫して、渡し守を捜しに出かけた際、ハゲネは水の乙女たちからこう占われるのである。

Dô sprach daz ander merewîp: diu hiez Sigelint:
 《ich wil dich warnen, Hagene, daz Aldriânes kint.
 durch der wæte liebe hât mîn muome dir gelogen.
 kumestu hin zen Hiunen, sô bistu sêre betrogen. (1539)

Jâ soltu kêren widere; daz ist an der zît,
 wand' ir helde küene alsô geladet sît,
 daz ir sterben müezet in Etzelen lant.
 swelhe dar gerîtent, die habent den tôt an der hant.》(1540)

.....

Dô sprach aber diu eine: 《ez muoz alsô wesen,
 daz iuwer deheiner kan dâ niht genesen,
 niwan des küneges kappelân, daz ist uns wol bekant.
 der kumet gesunder widere in daz Guntheres lant.》(1542)

シゲリントという別の水の乙女がいった、
 「アルドリアーンの子ハゲネ様、私はあなたにご注意しますわ。
 私の叔母は今、衣がほしいものだから嘘をついたのです。
 あなたがフン族の国へ行ったら、とんだ目にあわされますよ。

さあ、引き返しなさいな。今が分かれ目よ。
 あなた方、勇ましいお武家さんたちがエッツェルの国に招かれたのは、
 むこうで殺されるためなのです。
 あすこへ行く人は、死神について行くようなものだよ。」

.....

一人の乙女が重ねていった、「王室の司祭さん一人を除いて、
 ほかにあなた方だれも生きて帰れないことは、
 ちゃんときまってることなんです。それはよくわかっています、
 司祭さんはきっとグンテル王の国に帰れるんですから。」

そこでハゲネはドーナウ河を渡る際に、司祭を船から河の中へ突き落とすのであるが、司祭は泳ぎというものはできなかったのに、神の御手に救われてどうやら無事に、元の岸に帰り着くことができたのである。それによってハゲネは、水の乙女たちが占ったことが避けがたい運命であることを悟った(1580, 2-3)のである。

er dâhte: 《diese degene müezen verliesen den lîp》(1580, 4)

彼は思った、「これらの勇士は滅びなければなるまい。」

この瞬間ハゲネの内から英雄的なものが生じてきたのである。英雄的なものは「ある」(sein)のではなく、「成る」(werden)ものであることはすでに何度か拙稿²⁰⁾で述べたが、ハゲネが真に英雄的なもの、滅亡を自覚し自らそれに向かって突き進んでゆくまさにこのときからなのである。「これらの勇士は滅びなければなるまい」(1580)と悟ったあとのハゲネは、まさに古代ゲルマンの英雄そのものとして描かれているのである。ドーナウ河を渡ってしまったあとで、船をこわしてしまうのも、滅亡を恐れない勇敢なハゲネの古代ゲルマン的英雄精神の成せる行為である。帰るときにいかにして河を渡るのかというダンクワルトの質問に対して、「二度とそういうことはあるまい」(1582, 4)と答えるハゲネは、さらに続けてほかの者たちにも滅亡の自覚を促すのである。

Dô sprach der helt von Tronege: 《ich tuon iz uf den wân:
ob wir an dirre reise deheinen zagen hân,
der uns entrinnen welle durch zägeliche nôt,
der muoz an disem wâge doch liden schamelichen tôt.》 (1583)

トロネゲの勇士はなお語った、「我々の今度の旅路で、
臆病気を出して逃げてかえるような卑怯者があった場合、
そういう徒輩はこの河でみじめな死を
遂げる方がよいと思うので、こうやっておくのだ。」

まさにこの不屈の英雄精神のためにフォルケールはハゲネを尊敬するようになり(1584)、両者の間には揺ぎない友情——共に生を構築するのではなく、共に戦い死ぬといった友情²¹⁾——が芽生えてくるほどである。このように滅亡の運命を悟っても、フォルケールと共に英雄的なものへと自らを高めるハゲネは、寄せて砕ける波の中の巖であり、揺ぐことのない英雄となったのである。

フン族の国に到着してこのハゲネが中心になるのは必定である。彼は今や単なる防衛という消極性に甘んじる男ではなく、クリエムヒルトの挑戦に反抗するという態度を見せるのである。ジーフリトの剣をもってクリエムヒルトの前に現われる挑発的な態度(1783, 3-4)もその現われと言えよう。以後、いかなる困難にあってもハゲネは決して揺ぐことのない勇士であるが、その中で最も彼の強さを明示しているのが最終場面である。ブルゴント国の国王兄弟のうちゲールノートとギーゼルヘルも激しい戦いで果ててしまい、残るはグンテル王と重臣ハゲネだけとなったとき、両者は疲労のためにディエトリーヒによって捕えられ、別々の獄舎に閉じ込められる。クリエムヒルトはハゲネのいるところへ行って、こう言う。

20) 拙稿：「ニーベルンゲンの歌」——宮廷文学作品としての一考察——（『かいろす』第14号1976年）10頁並びに拙稿：「ニーベルンゲンの歌」とハルトマン作「イーヴァイン」——名誉(ère)と英雄たち——（徳島大学教養部紀要——人文・社会科学——第17巻1982年）83頁を参照のこと。なお、このハゲネの章については以前の拙稿と重複するところの多いことを付記しておく。

21) Vgl. Gottfried WEBER: a.a.O., S. 48-9.

Dô gie diu küneginne, dâ si Hagenen sach.
 wie rehte fientliche si zuo dem helde sprach:
 《welt ir mir geben widere, daz ir mir habt genomen,
 sô muget ir noch wol lebende heim zen Burgonden komen.》 (2367)

王妃はハゲネのいるところに行き、
 憎しみをこめて勇士に言葉をかけた、
 「もしおん身が先に私から奪ったものをまた返すつもりなら、
 命を助けてブルゴントの国元へかえしてとらせよう。」

このようにクリエムヒルトから財宝のありかを尋ねられたとき、ハゲネは以前取り交わしていた
 国王兄弟との誓約を持ち出して、こう言うのである。

Dô sprach der grimme Hagene: 《diu rede ist gar verlorn,
 vil edeliu küneginne. jâ hân ich des geschworn,
 daz ich den hort iht zeige, die wîle daz si leben
 deheiner mîner herren, sô sol ich in niemene geben.》 (2368)

猛々しいハゲネがいった、「そのようなお言葉は何の役にも立ち申さぬ、
 貴いお妃様。わしは、わが主君がたがお一人でもご存生の間は、
 宝のありかを言わぬと誓ったのでござる。
 それゆえわしは何びとにも宝は差しあげられぬのだ。」

このたじろぐことのないハゲネの言葉を聞いたクリエムヒルトは「では決着をつけよう」と言っ
 て、直ちに兄グンテル王の首を打ち落とさせ、髪を掴んでその首級を彼女はハゲネの前に持って
 行くのであるが、それはまたハゲネの思った通りのことであったのである。

Alsô der ungemuote sînes herren houbet sach,
 wider Kriemhilde dô der recke sprach:
 《du hâst iz nâch dînem willen z'einem ende brâht,
 und ist ouch rehte ergangen, als ich mir hête gedâht. (2370)

Nu ist von Burgonden der edel künec tôt,
 Gîselher der junge unde ouch her Gêrnôt.
 den schaz den weiz nu niemen wan got unde mîn:
 der sol dich, vâlandinne, immer wol verholn sîn.》 (2371)

悲痛の思いで主君の頭を打眺めていた勇士（ハゲネ）は、
 クリエムヒルトに向かっていった、
 「あなたは思いのままに決着をおつけなされた。
 それはまたわしの考えたとおりの成行きであったのだ。」

今はブルゴントの気高い国王をはじめ、
 若君ギーゼルヘルにゲールノート様もお果てなされた。

宝のありかを知るものは、神とこのわしとのほかは一人としてござらぬ。
 鬼女よ、あなたには宝は永久に隠されたままに相成り申そう。」

死に直面したこのハゲネの最後の言葉は最高の強さを発散させていると言えよう。ハゲネはクリエムヒルトによってその場で頭を打ち落とされるのであるが、名誉が最高に維持されたまま嘆くこともなく滅びていったハゲネは、巖のように揺がぬ英雄として不屈の精神を絶対化する中で強く生きたと言えるのである。例えば、ジーフリトはなるほどハゲネよりも外面的により強く理想化されて語られているが、しかし、内面的な強さと不屈の精神においてはハゲネが疑いもなく第一人者であると言えるのである。ハゲネは生まれつきの暗さを絶対的な暗さにまで押し進めたのである。詩人によってハゲネの形容詞として grimme (獠猛な) という語がたびたび用いられているのであるが、この語は、「地下」とか「悪魔」の意味を含んでいる²²⁾と言われている。ハゲネの不屈の精神はまさに暗い悪魔の力であるということを詩人はその語でもって常に意識していたのであろう。ハゲネの行動は常に悲劇的なものと結びついており、ハゲネの行為あるところ常に悪魔が潜む暗黒の世界なのであり、古代ゲルマン的色彩の強いハゲネの悲劇的状况こそこの「ニーベルンゲンの歌」という作品の悲劇の本質であると言っても過言ではないであろう。

4. 義仲像 ——信濃の田舎武将——

このように「ニーベルンゲンの歌」全体を通してみると、前編におけるジーフリトと後編におけるハゲネはその全体の悲劇のテーマにとっては無くてはならない存在であると言えるわけであるが、一方「平家物語」においても平家滅亡のテーマにとって無くてはならない人物としては前編の平清盛は勿論のこと、後編は木曾義仲と源義経とを挙げなければならないであろう。「平家物語」前編(巻第一～六)を清盛の栄華と衰退の兆しだととらえるなら、勿論「平家物語」後編(巻第七～十二)は平家一門の没落ととらえることができるのであるが、しかし、「平家物語」後編は平家一門の衰退を語ると同時にこの義仲と義経の活躍も同様に語られていると言えるのである。しかもこの二人は平家を倒していながら、自らも滅びてしまう結果となるのであり、この点でこの二人とも平家一門と同じように破滅を迎え、悲劇の人間と言わなければならないのである。以下、この章では木曾義仲の悲劇的状况について、また次章では源義経の悲劇的状况について述べることにしたい。

まず木曾義仲であるが、清盛死後の平家一門の没落に追い撃ちをかけたのが、言うまでもなく、この木曾義仲の進撃である。倶利伽羅峠の合戦で英雄ぶりを発揮して勝利を収めた義仲は、続く篠原の合戦でも平家を打ち倒したあと、五万余騎でついに都入りを果たし、ここに平家一門はいわゆる都落ちを余儀なくされるわけである。都入りまでの義仲は巧みな合戦の武将としてその英雄ぶりが描かれていると言えるのであるが、しかし、一旦都に入ってくると、義仲は野蛮人とし

22) Vgl. Gottfried WEBER: a.a.O., S. 57.

て嘲笑される立場に転落してしまう。二歳から三十歳過ぎまで信濃の国の木曾という山里に住み慣れていた義仲のその野蛮性をまず物語っているものがあの有名な「猫間」の章段である。

それは、あるとき、猫間中納言^{ねこま}光高^{みつたか}卿という人が義仲に相談があって、尋ねていった話なのであるが、郎党が「猫間殿がいらせられました」と取りつぐと、義仲は大いに笑って「猫が人間に直面するのかわ」と言っただけか、「せっかく猫殿^{ねこま}が食時^{けどき}に参られたのだから、食事をさしあげよ」といって、ひどく大きな田舎の茶碗に御飯を山盛りにして食事をすすめたのである。驚きあきれた猫間中納言は、さすがに食べぬのも悪いと思ったのか、箸をとって食べるふりをして下へ置くと、義仲は大いに笑って「猫どのは小食におおすよ。猫の食いちらしは有名じゃ。さ、掻いたまえ、掻いたまえ」とまで言うのである。木曾の山里で育った義仲にしてみれば、大きな茶碗に御飯を山盛りにして差し出すのが丁重なるもてなしだと思ったのであるが、相手の猫間中納言はすっかり興ざめて相談すべきことも一言も言い出さずして帰ったという話なのである。

ここでは要するに義仲は都の貴族生活にはなじめない野蛮人として戯画化されていると言えるのである。しかも義仲が都へ入ってからは、源氏の軍勢が満ちあふれ、いたるところで、人家に侵入して略奪したりする者が多く、義仲の評判は平家よりもひどく悪いものであった。ついに後白河法皇から義仲のもとへ御使が来て「狼籍をしずめよ」とまで言い渡されるのであるが、この場面でも義仲は戯画化されていると言えよう。すなわち、その御使は壱岐判官^{はんがんとしやす}知康という者で、天下に聞こえた鼓の名手であったので、時の人は鼓判官^{つづみほうがん}とも呼んでいたのであるが、義仲はその御使に直面すると、「いったい、和殿を鼓判官というのは、よっぽどおおぜいの者に打たれでもなさったのか、はられでもなさったのか」と義仲は聞くのである。その御使は返事もせず院の御所へ帰って「義仲は大ばか者でございます。すぐにも御追討なされたまえ。あれはいまに朝敵になりましょう」と申し上げ、この御使の讒言^{ざんげん}によって法皇もついに木曾討伐を思い立たれることになり、ここに義仲と法皇との間に大きな溝ができ、すぐあとの法住寺合戦へとつながってゆくわけである。従って、義仲の野蛮性が必然的に法皇との対立を深めると同時に、ついには頼朝とも決定的に対立して自らをも滅ぼす結果となったとも言えるのである。

しかし、「猫間」と「鼓判官」の章段で戯画化されていた義仲は、頼朝によって派遣された東国武士との戦いに至っては、北陸の倶利伽羅峠の合戦のときと同じように、またもや合戦の勇ましい武将として力をこめて語られているのである。しかし倶利伽羅峠の合戦では勝ち戦さであったが、このたびの義仲対頼朝の攻防戦は、ことごとく義仲に不利であった。頼朝派遣の六万の東国武士が、大手は蒲御曹司^{のりより}範頼を大將軍として勢田に、搦手は九郎御曹司^{からめて}義経を大將軍として宇治川へと追ったときには、すでに義仲にはわずかな部下しか残っていなかったのであるが、しかし、その滅びゆく負け戦さの中で義仲は木曾の田舎の武将としていかに強く生きたか、その英雄ぶりが力強く語られていると言えるのである。有名な「木曾最後」の章段がそれである。

義仲には乳兄弟で、竹馬の昔から、死なば一つ所だと誓い合った仲の、今井の四郎兼平という家臣がいたが、この「木曾最後」の章段ではとりわけこの二人の主従関係が美しく語られている

とも言える。戦さに負けて落ちのびている最中にも、義仲の頭の中にあつたのは今井四郎兼平のことで、また同様に兼平にとつても気にかかるのは主君義仲のことだったのである。京都方面から来た義仲と勢田から来た今井とが大津の打出の浜で出会ったとき、二人は非常に喜んだが、むろんそれは——山田昭全氏の指摘のごとく——彼らの敗色をくつがえすための喜びではない²³⁾。これで一緒に死ねるといふ、悲壮な安堵感に似たよろこびに外ならなかった²⁴⁾であろう。このときの二人の対話からは、その二人の絆の強さが感じとられるのである。

木曾殿今井が手を取て宣けるは、「義仲六條河原で如何にも成べかりつれ共、汝が行末の戀しさに、多くの敵の中を懸け破て、是迄は逃たる也。」今井四郎、「御諛誠に忝なう候。兼平も勢田で討死仕るべう候つれ共、御行末の覺束なさに、是迄参て候。」とぞ申ける。木曾殿、「契は末だ朽せざりけり。義仲が勢は敵に押隔てられ林に馳散て、此邊にもあるらんぞ。汝が巻せて持せたる旗上させよ。」と宣へば、今井が旗を差し上たり。
(巻第九「木曾最後」)

(木曾殿は今井の手をとつて、「いかに兼平、義仲は、六条河原で危うく討ち死にするところであつたが、そなたの行くえのおぼつかなさに、あまたの敵にうしろを見せて、これまでのがれて参つたぞ」今井四郎も、「かたじけない御言葉、兼平も勢田で討ち死につかまつべきところを、御行くえのおぼつかなさに、これまでのがれて参りました」「さてはちぎりはまだ朽ちなかつたと見える。義仲の勢は、山林にはせ散つて、まだこのあたりにいるやもしれぬ。そなたが旗を今一度あげさせよ」兼平は、巻いて持たせていた旗をさっとさし上げた。)

兼平が旗をさっとさし上げると、京から落ちてきた者や勢田から逃げて来た者たちが、いずれとも分ちなくこの旗に目をとめて、駆け集まり、その勢がそのうちに三百余騎となり、この三百余騎で義仲と兼平は敵六千余騎の中へ駆け入つて、最後の合戦をするわけである。

木曾左馬頭其日の装束には、赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧着て、鍬形打たる甲の緒しめ、いか物作の大太刀帯き、石打の矢の、其日の軍に射て、少々残たるを、首高に負なし、滋籐の弓持て、聞る木曾の鬼葦毛と云ふ馬の突て太う退に金覆輪の鞍置て乗たりける。鎧踏張立上り、大音聲を揚て名乗けるは、「日此は聞けん物を、木曾冠者。今は見るらん、左馬頭兼伊豫守朝日將軍源義仲ぞや。甲斐の一條の次郎とこそきけ。互に好い敵ぞ。義仲討て兵衛佐に見せよや。」とて喚いて懸く。
(巻第九「木曾最後」)

(木曾殿のその日のいでたちは、赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧を着て、鍬形を打つた兜の緒をしめ、怒物作りの太刀を帯び、二十四本差した石打の矢の、今日の戦に射て、残り少なくなつたのを頭高に負ひ、滋籐の弓の唯中を取つて、名だたる木曾の鬼葦毛という馬に、金覆輪の鞍を置いてうち乗り、鎧をふんばつて大音聲をあげ、「日ごろも聞きけん木曾の冠者を、いまこそ見よ、左馬頭兼伊予守、朝日の將軍源義仲であるわ。それなるは甲斐の一

23) 山田昭全：前掲書、114頁。

24) 同上書、114頁。

条次郎とぞ聞く。みごと義仲を討って、兵衛佐の見参にいれよかし」)

法皇から賜った「朝日の将軍」という呼称をほこらかに堂々と名のっているこの言葉の中には、今井四郎と再会して死を覚悟した義仲の意気盛んな勇壮な姿があざやかに読み取られうるのである。今や義仲は、——永積安明氏の指摘の通り——「猫間」の章段に描かれたような卑小なイメージから、本来の英雄的武将、俱利伽羅峠の合戦以来の果敢で勇壮な武人としての姿に立ち返るのである²⁵⁾。義仲の英雄的武将らしさは、敵の中を駆け抜け、駆け破りしているうちに、ついには主従五騎となってしまったときにも、なお読み取られうると言えよう。その五騎の中には、義仲が信濃から連れて来ていた巴^{ともえ}という勇敢な女性がいたが、義仲は巴を呼んでこう言うのである。

「おのれは、とうとう、女なれば、何地^{いづち}へも落ゆけ。義仲^{おち}は討死^{じに}せんと思ふ也。
若し人手^もに懸らば自害^{じがい}をせんずれば、木曾殿^{きそ}の最後の軍^{いぐさ}に、女を具せられたりけりなど言れん事も、然るべからず。」
(巻第九「木曾最後」)

(「そなたは女子だ。これより早く、どこへなりと落ちてゆくがよい。われはここで討ち死にするか、自害する覚悟だ。あれ見よ、義仲は最後まで女をつれていたとあっては末代までの恥、疾^とうとう去れよ」)

死を前にして義仲は、名誉というものを重んじる武将として描かれてもいるのである。こうして巴は、離れがたくはあったけれども、東国の方へ落ちて行き、手塚太郎は討ち死にし、手塚の別当は落ちて、あとは木曾義仲と今井四郎のただ二騎ばかりとなる。この義仲と今井四郎との間の絆は、ちょうど「ニーベルンゲンの歌」におけるハゲネとフォルケールとの間の堅固な絆を彷彿とさせるが、この義仲と今井の場合には、「ニーベルンゲンの歌」の場合と違って人間的な弱さと美しさが読みとられると言えるであろう。

今井^{しうじう}の四郎、木曾殿^な、主従二騎^{のたまひ}に成て宣^{ひごろ}けるは、「日来は何とも覺えぬ鎧^{よろひ}が、今日は重^{おも}う成^なたるぞや。」今井四郎申しけるは、「御身^{いまだつか}も未^な疲れさせ給はず、御馬も弱^{よわ}り候はず。何^{なに}に依^よてか一領^きの御著^{きせ}背長^{なが}を重^{おも}うは思^{おも}食^く候べき。其^{それ}は御方^{みかた}に御勢^{せい}は候はねば、臆^{おく}病^{びやう}でこそ、さは思^{おも}召^{めし}候へ。兼平一人候とも、餘^{あま}の武者千騎^{せんき}と思^{おも}召^{めし}せ。矢七八候へば、暫^{しばら}く防^かぎ矢^や仕らん。あれに見^{あは}え候は、粟津^{あはづ}の松原^{まつはら}と申。あの松^{まつ}の中で御自害^{じがい}候へ。」とて、打^うて行く程^{ほど}に、又^{また}荒手^{あらく}の武者五十騎^{ごじゅうき}許^{ばかり}出来たり。

(巻第九「木曾最後」)

(あとは木曾殿と今井四郎、ただ二騎ばかりとなった。「日ごろはなんとも思わぬ鎧が、今日はいたく重いように感じられる」木曾殿の述懐を聞いて、今井が、「いや、おからだもまだお疲れになってはおられませぬし、御馬も弱ってはおりませぬ。一領の鎧が、なんでにわかに、重くなるわけがござりましょう。それは、味方に続く勢がなきゆえの臆病心。兼平一人をば、余の武者千騎とおぼしめして、私がしばらく防ぎ矢つかまつっておる間に、かなたに

25) 永積安明：前掲書、136頁。

見ゆる粟津^{あわづ}の松原の中で、静かに御自害なされませや」そうして馬を進めてゆくうちに、またもや新手の武者五十騎ほどがあらわれた。

「日ごろはなんとも思わぬ鎧が、今日はいたく重いように感じられる」と弱音を吐く義仲は、「ニーベルンゲンの歌」におけるハゲネとは異なって、人間的な弱さをも持ち合わせているわけであるが、兼平が「一領の鎧が、なんでにわかにも、重くなるわけがござりましょう」と言って主君を励ますところにもまた義仲と兼平との主従関係の美しい絆がひしひしと感じられるのである。乳兄弟というのは、実際に血を分けた兄弟よりも結びつきが強いとされている²⁶⁾が、今井は、乳兄弟でかつ主君の義仲に武将としての立派な最期を遂げさせてあげたいというこまやかな心遣いから、義仲を勇気づけてなおも続けてこう言うのである。

「君はあの松原へ入せ給へ。兼平は此敵防ぎ候はん。」と申ければ、木曾殿のたまひけるは「義仲都にて如何にも成べかりつるが、是迄逃れ来るは汝と一所で死なと思ふ為也。所々で討れんより一所でこそ討死をもせめ。」とて、馬の鼻を竝て、懸んとし給へば、今井四郎馬より飛下、主の馬の口に取附いて申けるは「弓矢取りは、年比日比如何なる高名候へども、最後の時不覺しつれば、永き瑕にて候也。(御身は疲させ給ひて候。續く勢は候はず。) 敵に押隔てられ、いふがひなき人の郎等に組落されさせ給て討れさせ給なば、さばかり日本國に聞えさせ給ひつる木曾殿をば、何某が郎等の討奉たるなど申さん事こそ口惜う候へ。唯あの松原へ入せ給へ。」と申ければ、木曾「さらば」とて、粟津の松原へぞ駈け給ふ。

(巻第九「木曾最後」)

(「兼平はこの敵をしばらく防ぎまいらそう。君はあの松原へ入らせたまえ」今井が重ねてそう言うと、木曾殿は、「六条河原で死ぬところを、多くの敵に後ろを見せて、これまで逃げてまいったは、ただただそなたと一ところで死なさんがためであった。とてもものに、離ればなれに討たれるよりは、一つ所で討ち死にしようではないか」と、馬の鼻をならべて敵中へ駆け入ろうとすると、四郎は馬から飛びおり、主君の馬の口にとりつき、涙をはらはらと流して、「武士たるものは、日ごろ、いかに功名をなすとも、最期に不覺をいたさば、後世までも名にきずがのこります。やつばらに言いがいもなく討たれては、さしも日本國に御名をとどろかせた、木曾どののお身が惜しまれる。ただ曲げて、あの松の中へおはいりください」木曾どのも、もっともとうなずき、「さらば」とばかりただ一騎粟津の松原へ駆けて行った。)

今井四郎の言葉に従って粟津の松原へ駆けて行くその途中、義仲は今井のことが気にかかって後ろをふり仰いだ瞬間、敵の放った弓の矢が当って、ついには首を取られてしまうのである。こうして義仲は粟津の原に倒れたのであるが、——富倉徳次郎氏の指摘のごとく——この今井の身を案じて振り返った瞬間をその最期とした義仲の死は決して不名誉ではない²⁷⁾。義仲は全く本来の義仲となって死んでいったと言ってよいのである²⁸⁾。また一方、義仲の最期を知った今井四郎

26) 山田昭全：前掲書、115頁。

27) 富倉徳次郎：平家物語——変革期の人間群像——日本放送出版協会 1972年、113頁。

28) 同上書、113頁。

は「今は、たれをかばって戦おうぞ。これ見たまえ、東国の殿原、日本一の剛の者が自害の手本よ」と叫んで、太刀の切っ先を口にふくみ、馬からまっさかさまに飛び落ちて自害を果たすが、中世の武士としてのエネルギーな意志と行動力とを見せた今井四郎兼平らしい最期である。こうして終始一心同体であった義仲と兼平の二人は、最後まで戦闘に殉ずるこの変革期の運命を彼ら自身のものとして死んでいったと言える²⁹⁾のである。貴族的世界から武士の世界へ移りゆく変革期の中で、朝日のごとく木曾の山中からたちまちのうちに都の空へ昇ったかと思うと、たちまちのうちに沈んでゆくこの義仲の運命も、清盛の栄枯盛衰と相通じるところがあり、その意味で義仲には最初から滅びゆく悲劇がつきまわっていたと言ってもよいであろう。義仲と頼朝との対立は、義仲の父義賢が頼朝の兄義平に討たれたとき（当時義仲二歳）からのいわば宿命であり、従兄弟の頼朝よりも早く平家を追い落として都に旗を立てることを急ぎに急いだ義仲は、その剛勇さで一時は入洛を果たしたものの、その野蛮性によって、貴族生活にはなじむこともできず、都の人々からは嫌われ、後白河法皇とは対立するばかりか、ついには平家と頼朝との間に挟撃の姿となって最後の合戦を迎えることとなり、文字通り四面楚歌の中で滅びてゆくこととなるのである。頼朝のような慎重な政治家タイプの人間ではなく、自ら直接行動する風雲児であった³⁰⁾義仲は、その野蛮性のゆえに、徹頭徹尾、悲劇の人であったと言わなければならないのである。

5. 義経像 ——合戦の武将・悲運の名将——

平家を倒しておきながら滅び去ることとなったこの義仲の運命によく似ているのが、源義経の運命である。この義経も平家を倒しておきながら、結局は自らも滅んでゆく悲運の武将だと言わなければならないのである。しかし、その義経を悲運の武将だと呼ぶためには、その悲運の前提として義経の英雄像が語られなければならないであろう。「平家物語」後編においてはまさにその義経の英雄像が高らかに歌い上げられていると言えるのである。

その義経が「平家物語」に初めて登場するのが義仲軍との合戦の時である。このとき大手の大將軍は蒲御曹司範頼、搦手の大將軍は九郎御曹司義経であったが、この大手範頼と搦手義経の役割は、——山田昭全氏も指摘されているように——以後、平家を壇の浦に壊滅させるまでほぼかわらない³¹⁾。搦手から虚をついて敵を狼狽させて攻め込む義経の戦法は、義経独自のもので、「平家物語」における義経像の特質であると言えよう。すなわち、義経は「平家物語」においては、合戦における武将としてその叡知と行動力とで賛美されているのである。宇治川をはさんで義仲の軍勢と相対したときも、義経は、部下を巧みにふるい立たせて、佐々木高綱と梶原景季の有名な先陣争いを初めとする俊敏果敢な渡河作戦を展開させるのであり、義経の行動がいかに俊

29) 同上書、113頁。

30) 山田昭全：前掲書、124-5頁。

31) 同上書、174-5頁。

敏果断であったかは、義仲が法皇を奪って西国へ落ち下ることを考えたときには、すでに義経が御所にかけて厳重に守護していたことから容易にうかがえよう。

この戦術家義経のすばやい奇襲作戦は、一の谷の合戦においても読み取られうる。いわゆる「^{ひよどりこえ}鶴越の坂落とし」がそれである。一の谷を攻めるにあたって、搦手の大將軍義経は、一万騎をさらに二手に分けて、土肥次郎実平以下七千余騎を一の谷の西の手へやり、自身は三千余騎をひきいて、一の谷の背後の鶴越から攻撃をしかけようとするのである。ところがこの鶴越は評判の難所で、たやすく人の通えるところではないと言われていたのである。それにもかかわらず、否、人の通えないほどの難所だったからこそ、義経はそこから馬を落として一の谷の平家を攻めるのである。「馬は、乗り手が心得て落とさば、痛うは損ずまじ、それ落とせ。義経を手本にせよ」(巻第九「坂落」)と言って自らがその鶴越の坂を降り下る義経の戦法は、上でも述べたように義経独自の戦法であり、その特質は、——富倉徳次郎氏の言葉を借りて表現すれば——敵の予想もし得ない地点に小部隊を突入せしめ、まず敵陣に火を放って、敵をして周章狼狽せしめ、その全部隊を敗走せしめる³²⁾ ことにあると言えるのである。

この義経の特徴とする奇襲戦法は、屋島に逃げのびた平家を攻める際にも用いられる。摂津の国から船出をしようとしたところ、北風が激しく吹いて、大波が起こって船を破損させた折りのことである。修理のためにその日は船出ができず、留まることになったのであるが、そのとき義経は梶原景時と有名な「^{さかろ}逆櫓」の口論をするのである。

^{わたなべ}渡邊には大名小名^{よりあ}寄合ひて、「^{みないくさ}抑船軍の様は^{いまだてうれん}未訓練せず、^{いかに}如何あるべき。」と^{ひやうぢやう}評定す。梶原申けるは、「^{さかろ}今度の合戦には船に^{たて}逆櫓を立候はばや。」判官、「^{さかろ}逆櫓とはなんぞ。」梶原、「^{かけ}馬は^{かた}駟んと思へば、^{ゆんで}弓手へも^{めて}馬手へも^{まは}廻し易し。船は^{おし}きと^{おし}推もどすが^と大事候、^と艀舳に^と櫓を^{たて}立違へ、^{かぢ}わい楫を入て、^{ひとひま}どなたへも^{ひか}あう推す様にし候ばや。」と申ければ、判官宣ひけるは、「^{あし}軍と云者は一引も引じと思ふだにも^{あし}あはひ悪ければ、^{ひく}引は常の習なり。本より^{にげ}逃まうけしてはなんのよかるべきぞ。先づ^{あし}門出の悪さよ。^{さかろ}逆櫓を立うとも^{かえまら}返様櫓を立うとも、^{たて}殿原の舟には^{ちやう}百丁千丁も^{たて}立給へ。義経は本の櫓で候はん。」と宣へば、梶原申けるは、「^か好き大將軍と申は、^か駟べき所をかけ、^{またう}引くべき所を引いて、^{かたき}身を全し^{ほろぼ}敵を亡すを以て、^もよき大將軍とはする候。片^{かた}趣なるをば、^{かのししひしや}猪武者とて、^か好きにはせず。」と申せば、判官、「^{かのししかのしし}猪鹿は知らず、^{いくさ}軍は^{ひらせめ}唯平攻に攻て、^{せめ}勝たるぞ^{ここ}心ちはよき。」と宣へば、侍共^{かぢはら}梶原に^{おそ}恐れて^{わら}高きは^{はな}笑はねども、^{かぢはら}目引き^{すて}鼻引きさざめきあへり。判官と梶原と、^{いにくさ}已にとし軍あるべしとさざめきあへり。(巻第十一「逆櫓」)

(渡辺のほうでは、東国の大小名が寄り合って、「^{みないくさ}だいたい、われらは船戦にはまだ慣れておらぬ。どうしたものであろう」と評定。すると梶原景時が進み出て言うには、「今度出発する船には逆櫓をつけたがよいとぞんずる」^{さかろ}逆櫓とはなんぞ判官がきき返すと、「馬が駆けようと思えば駆け、^ひ退こうと思えば^ひ退き、左へも右へも回しやすいうように、船は必要しいに、向きをかえることがたいせつでござります。そこで、船首と船尾に櫓を装い、側面にも

32) 富倉徳次郎：前掲書、119頁。

脇楫わきかじを入れて、いずれへも回しやすいようにいたしたいとぞんじます」「いくさの門出もんいに縁起えんぎでもあるまいぞ。いくさというものは、一步も退くまいと思うてさえ、ぐあいが悪ければ、退くのが常の習い。まして、はじめからさように逃げたくなどしては、よかろうはずがあるか。他の者の船には、逆櫓かえさきまろなりと、返様櫓かえさまろなりと、百丁でも千丁でも立てようと勝手だが、この義経にあっては、従来どおり櫓一丁でじゅうぶんだ」梶原はおしかえして、「よき大將軍と申すものは、進むべきところは進み、退くべきところは退き、身を全まっとううして敵を滅ぼすをもって、上乘とされております。そのように融通ゆうづうのきかぬのは猪武者いのししとって、良将とは申しませぬ」「猪か鹿かは知らぬが、いくさはただ正面からひた押しに攻め勝ってこそ心地よき勝利と申すもの、逆櫓は無用」と言いきったので、居合わせた侍どもは、梶原を恐れて高い声で笑わなかったが、目鼻で合図しながら、ひそかにささやき合った。

その日義経と梶原とは、危うく同士討ちをはじめそうになったくらいであるが、修理が済むと義経は強風の海の中へ船を出そうとするのである。船頭たちが「この風は追風でございますが、あまりにも強すぎます。沖はさぞ荒れておりましよう」と言うと、義経は大いにせきたってこう言うのである。

「野山のやまの末すえにてしに、海河うみがはのそこにおぼれてうするも皆これせんぜの宿業しゆくごふ也。海上にいで浮うだる時風強きとていかがする。向ひ風に渡らんと言ばこそ僻事ひがごとならぬ。順風じゆんふうなるが、少し過すぎたればとて、是程こゝろほどの御大事おんじだいに、争いかにか渡らじとは申まをすぞ。船仕ふねざしらずば一々にしやつ原射殺せ。」
(巻第十一「逆櫓」)

(「野山のやまに斃なほれ、海川うみがはにおぼれ死ぬのも、皆これ前世しゆくごうの宿業である。海上に出て浮んだときは、風が強いからとて留められるか。向かい風にさからって渡ろうとでも申すならば義経がわりでもあろう。順風がすこしばかり強すぎたとて、これほどの大事に渡れぬとは何事ぞ。疾う船を出せ。出さねば、しやつらを片っ端から射殺せ))

部下たちも「どうせ死ぬなら、ここで射殺されるのも同じこと。風が強かったら、沖で死ぬまでのこと」と覚悟を決めて、二百余そう艘ふねの船のうち、わずか五艘ごふねが纜ともづなを解いて走り出したのである。残りの船は風を恐れるか、梶原におじるかして出なかったが、義経はまたもやこう言う。

「人の出ねばとて留とどまるべきにあらず、唯ただの時かたきは敵も用心すらむ。かかる大風大波おほいなるかたきうたなに思も寄らぬ時におしよせてこそ思ふ敵を討うずれ。」
(巻第十一「逆櫓」)

(「人が出ぬとて、とどまるべきではない。普通ふつどのときは、敵も恐れて用心するであろう。かかる大風大波に、思いもよらぬ所へ押し寄せてこそ、思う勝利がえられるのだ))

このように「いくさはただ正面からひた押しに攻め勝ってこそ心地よき勝利と申すもの、逆櫓は無用」とか、あるいは「かかる大風大波に、思いもよらぬところへ押し寄せてこそ、思う勝利がえられるのだ」と主張して、合戦の中へ突き進んでゆく義経の行動は、合戦の武将としての義経の魅力的な特質の一つであり、そのエネルギッシュな行動力は、「ニーベルンゲンの歌」で言えば、後編でドーナウ河を渡ったのちに船をこわして破滅の中へと突き進んでゆく勇猛果敢なあ

のハゲネの行動力によく似ていると言えよう。ハゲネの行動力が中世騎士世界にあって古代ゲルマンの勇猛果敢な精神を彷彿とさせているならば、逆に義経のそれは古代貴族社会の殻を抜け出した、新興階級としての武士のエネルギーを余すところなく燃焼させていると言ってもよいであろうか。ともかく義経はこの大風の中へ船を乗り出したがため、危険ではあったものの、しかし、普通は三日でわたる行程をただの六時間で渡ってしまったのである。

こうして義経らしい奇襲戦法で、義経は敵の気づかぬまにすばやく屋島の城へと押し寄せ、ここに屋島の合戦が繰り広げられることとなるわけであるが、この合戦においても義経は部下とともに自ら戦場を馳駆するエネルギーな武将として描かれていると言えよう。しかもさらにここでは、——上横手雅敬氏によっても指摘されているように——義経は勇猛果敢なばかりでなく、すぐれた人格をも具えた理想の武将としても描かれている³³⁾のである。忠実な部下の一人佐藤三郎嗣信が主君義経の身代わりとなって能登守教経の強弓に射殺されたとき、義経は近所から高德の僧を招いて、大夫黒という名の自らの愛馬を与えてまでも、嗣信の死を丁重に弔らわせたのである。これを見た部下たちも、みな感涙を流して「この君のおんために命を失うことは、露ほども惜しくはない」と言い合った程である。さらにまた「弓流」の章段になると、義経は部下を愛し、名と恥を重んじる大将³⁴⁾としてその勇将ぶりが高らかに歌い上げられていると言えるのである。すなわち、合戦中に弓をひっかけられて手から落としてしまった義経は、それをうつぶしになって、むちでかき寄せて取ろうとすると、味方の武士どもは、「捨てさせたまえ、捨てさせたまえ」と言ったが、ついに拾い上げて笑って帰った。老臣どもがそれを非難して、「たとえ、千疋万疋の価高き弓であろうとも、いかでか御命に替えられましようか」と言うと、判官はこう答えるのである。

「弓の惜さに取らばこそ。義経が弓といはば、二人しても張り、若は三人しても張り、伯父の為朝が弓の様ならば、態も落して取すべし。旺弱たる弓を、敵取も持て、『是こそ源氏の大將九郎義経が弓よ。』とて嘲弄せんずるが口惜ければ、命に代て取るぞや。」
(巻第十一「弓流」)

(「弓が惜しさに捨うたのではない。義経の弓が、二人がかりか三人がかりでなければ張れぬ、叔父為朝のような弓ならば、わざとでも落としてとらせるのだが、張りの弱い弓を敵が拾って、『これが源氏の大將軍九郎義経が弓よ』などと嘲弄されるのがくやしさに、命に替えて捨ったのだ))

この言葉を聞くと、郎党どもはみな感じ入ったのであるが、このように義経は名誉を重んずる武将であると同時に、郎党どもをも巧みにふるい立たせる術を心得ているまさに合戦の名将とも言えるのである。名誉を重んじ、郎党どもをふるい立たせるという点でも義経は、またもや「ニーベルンゲンの歌」におけるハゲネに似ていると言えるのであるが、さらに疲れていても寝ずに見

33) 上横手雅敬：前掲書(下)、108頁。

34) 同上書、109頁。

張りに立つ点においても共通すると言えよう。すなわち、屋島に攻めて入った夜はさすがに激しい疲労のため、全軍前後不覚に寝入ったわけであるが、その時義経は彼の忠実な部下伊勢三郎よしもり義盛と共に一睡もせず、敵の攻撃に備えて歩哨に努めるのである。この場面などは「ニーベルンゲンの歌」においてハゲネとその部下フォルケールの二人が寝ずの見張り番をする場面とよく似ているのである。要するに、「平家物語」における義経像の特徴は、指揮官であるとともに、自ら進んで合戦に参加するところにある³⁵⁾と言えるのであるが、この新しいタイプの武将ぶりをはっきりと物語っているのが、このすぐあとの壇の浦の合戦に際しての梶原景時との先陣争いである。

其日判官は梶原すでと既に同志軍どしいくさせんとする事あり。梶原、判官に申けるは「今日の先陣をば、景時にたび候へ。」判官、「義経がなくばこそ。」と宣へば、「大將軍にてこそ在々候へ。」と申ければ、判官、「思ひも寄らず、鎌倉殿こそ大將軍よ。義経は奉行を承たる身なれば、唯殿原とのぼらと同事おなじぞ。」と宣へば。梶原、先陣を所望しかねて、「天性てんせい此殿は侍しうの主には成り難し。」とぞつぶやきける。判官、是を聞き「日本一の嗚呼をの者哉。」とて。太刀の柄つかに手をかけ給ふ。梶原「鎌倉殿より外しやうに主を持たぬ者を。」とて、是も太刀の柄つかに手を懸けり。(巻第十一「鷄合壇浦合戦」)

(その日判官と梶原景時が、危うく同士討ちにおよぼうとした事件があった。原因は梶原が判官に、「今日の先陣は、景時に賜りたい」言いだしたのに対し九郎判官が、「義経がいなければもう」とにべもなくしりぞける。景時がかさねて、「大將軍たる者は先陣をなすべきではない」義経は笑って、「鎌倉どのこそ真の大將軍、義経は、いくさぶぎやう軍奉行を承ったにすぎぬ。格は和殿たちと同じことだ」梶原はそう言われると強いて先陣を望みかね、「九郎殿は、しよせん侍の主にはなれぬ方よ」とつぶやいた。これを耳にした判官は、「日本一のたわけめが」と太刀の柄つかに手をかければ、梶原も、「鎌倉どののほかに主は持たぬ梶原に、何をぬかすぞ」と、これも太刀の柄に手をかける。)

「逆櫓」の場面と同じようにこの先陣争いの場面でも危うく同士討ちになるところであったが、要するに、大將軍義経は「自ら雑兵のように身をやつして、よき武者の乗っている平家の兵船を攻めたてる」(巻第十一「遠矢」)のであり、この点で義仲と同様、自ら進んで合戦へと突き進んでゆく合戦の武将として描かれていると言えるのである。

しかし、そのことを逆に言えば、義経は結局は、義仲と同じように、軍事力しか考えることのできない直線型の武将であったと言わなければなるまい。梶原景時の罵りの通り、義経は「しよせん侍の主にはなれぬ」武将であり、義仲と同様、陣頭指揮型の武将ではあっても、しよせん政治的な包容力には欠けていた³⁶⁾と言わなければならぬのである。ただ義仲と異なる点は、義仲がその粗野な性格のために都の人々からは嫌われ、皇室とも真正面から対立していたのに対して、義経は平家を滅ぼし都に平和を取り戻した第一の名将として都の人々からは賞賛的となり、

35) 石母田正：前掲書、99頁。

36) 永積安明：前掲書、157-8頁。

壇の浦で壊滅後生捕りにされた平家側からさえも「情のある男」として考えられる程であり、さらには皇室との関係もわりとうまくいっていたということである。しかし、この義経の人気と皇室との親密な結びつきとが、皮肉なことにも頼朝との対立を早め深める結果ともなるのである。義経についての世間の評判をよからぬものと思っていた頼朝は、ほかに梶原景時のざんげん讒言等もあつてついに義経追放を決意し、義経が都から宗盛父子を護送して関東にやってきたときには、こう言つて義経を警戒するのである。

「九郎はすすどきをのこなれば此した畳の下よりもはひいで這出んずる者也。但し頼朝はせらるまじ。」
(卷第十一「腰越」)

(「九郎はすばやい男ゆえ、この畳の下からでも、はい出しかねないが、われにおいては決して彼に、乗ずるすきはあたえぬ」)

いつどこから姿を現わすかも知れないというこの義経の神出鬼没性³⁷⁾も、沈着冷静な政治家タイプの頼朝には通じなかつたのであり、義経は鎌倉に入ることも許されず、かねあらいざわ金洗沢の関で宗盛父子を手渡すや、そのまま腰越まで追い返されてしまうのである。義経の悲劇的生活はここに始まり、その後義経自ら、まさに平家一門と同じように都落ちを余儀なくされる羽目となるのである。頼朝の実に巧みな政治的手腕によって、源平合戦の英雄もたちまち一転して放浪の身となるばかりか、ついには奥州平泉において自害して果てなければならぬ運命にあるのである。「平家物語」ではなるほど義経の死までは語られていないが、しかし、追放だけで義経の悲劇性は十分である。義仲の場合と同じように義経もにわかに栄えたかと思うと、たちまち追放の身となりはかなくも消えていったのである。「朝に変わり夕に変わる、この時代の不安定はまことに悲しく」(卷第十二「判官都落」)、昨日の友は今日の敵というわけで、義経の追放は人の心の変わりやすさ、この世の無常というものをまざまざと見せつけていると言えよう。しかし、この無常の合戦の中で義経は義経らしい奇襲戦法を使うことによって合戦の名将として高らかに歌い上げられているのである。合戦の名将として歌い上げられているだけに、義経もまた悲運の武将であったと言わなければならないのである。

結 び

以上「ニーベルンゲンの歌」ではジーフリトとハゲネ、「平家物語」では清盛と義仲及び義経を中心にその悲劇的狀況を見てきたが、これらの人物に共通して言えることはいずれもが最後には破滅を迎えるということである。そしてその破滅の悲劇的狀況が、同時に人物形象の仕上げともなっており、いかなる死をとげたかによって、その人物の性格が浮彫にされている³⁸⁾のであり、さらには両作品の文学的特質の相違をも明確に打ち出すことにもなっていると言えるのであ

37) 山田昭全：前掲書、181頁。

38) 杉本圭三郎：前掲書、98頁。

る。

まず「ニーベルンゲンの歌」におけるジーフリトは、不死身の英雄であるとはいえ、クリエムヒルトを妻に迎える限り、最後には滅びなければならない運命にあったのであり、中世騎士的な愛（ミンネ）もここでは古代ゲルマンの運命観によって死に結びつけられているのである。この中世騎士的な要素と古代ゲルマン的な要素とが見事な融合を示しながら、この宮廷叙事詩の中で古代ゲルマン的精神が潑刺と脈動しているところにこの作品の特質があると言えるのである。そしてこの古代ゲルマン的精神が生き生きと描かれているのがともかくもハゲネの世界なのである。ハゲネは絶望的な状況にあっても勇敢に破滅へと立ち向かってゆく古代ゲルマン歌謡の英雄たちに似ているのである。自ら勇敢に破滅に向かって突き進んでゆかざるをえないこの悲劇的運命こそまさにこの叙事詩を貫いているイデーであり、フリードリヒ・パンツァーなども、「この叙事詩に現われる人物たちが支配されていると感ずる力、及びこの作品のあらゆる出来事を決定づけている力は、『神』ではなく実はこの『運命』なのである」と述べている³⁹⁾。文豪ゲーテも1827年版のカール・ジムロック訳でこの叙事詩を読んだとき、「モチーフは徹頭徹尾異教的」(durchaus grundheidnisch) という感想を述べており、「神の支配する痕跡もない」(keine Spur von einer Gottheit) のであって⁴⁰⁾、「ニーベルンゲンの歌」の本質には、取り扱われた古代ゲルマンの素材に特有な精神が忠実に残されているのである。当時の宮廷叙事詩の理想的世界とは異なった伝説的・英雄主義的な悲劇的世界を展開させている点にその文学的特質があると言えるのである。

このように「ニーベルンゲンの歌」におけるジーフリトとハゲネは、伝説的・英雄主義的な性質を有しており、その英雄像は超人間的・巨人的な「力」を賛美していると考えれば、一方「平家物語」の登場人物たちは、歴史的・人間的な性質を有する存在であり、その全体像は人間生活の中の「無常」というものをひしひしと感じさせるものであると考えることができよう。「平家物語」は、畢竟するに、「ニーベルンゲンの歌」とは異なって、源平合戦という史実を素材としたものであって、その史実を文学的に虚構化することによって、一つの新しい中世文学としての叙事詩的世界を創り上げたと言えるのである。「平家物語」に展開された世界は、上で見てきたように、貴族世界と武士世界とが対立する世界であり、この古代勢力と中世勢力との狭間で悪役として描かれて必然的に滅びてゆかざるをえなかった清盛は、まぎれもなく一人の悲劇の人間であり、その清盛の栄華と病死による没落の中には、古代から中世に移りゆく時代の流れとともに「たけき者もついには滅びぬ」という栄枯盛衰の^{ことわり}理が読み取られうるのである。そしてその平家一門の没落に拍車をかけた義仲も、またその粗野な義仲を滅ぼすとともに一の谷・屋島を経て壇の浦において平家を壊滅させた義経も、栄えたかと思うとたちまちのうちに滅びてしまうのであり、この点でこの二人の運命も清盛の栄枯盛衰に相通じるところがあると言える。要するに、「平家物語」は平家滅亡の物語だけを語ったものではなく、その平家を都から

39) Friedrich PANZER: a.a.O., S. 207.

40) Meyers Klassiker-Ausgaben, Goethes Werke, Bd. 26, Das Nibelungenlied. S. 417.

追い出し倒した義仲・義経等の英雄譚もまたその悲運も同時に語られているのである。古代貴族の世界から中世武士世界へ移りゆく乱世の中で、その時代の主人公たちはいかに栄え、いかに滅びたか、その栄枯盛衰がこの作品の本質であり、平家一門の栄華と滅亡の物語と同時に義仲・義経の武士的世界を語る中から「無常」というものをまことこまやかに語っているところにこの「平家物語」の一つの特質があると言えるのである。このように「ニーベルンゲンの歌」が古代ゲルマンの宿命観を彷彿とさせているとするならば、「平家物語」は貴族と武士との対立の中で滅びてゆく運命にあるものが必然的に滅びてゆく人間社会の中の「無常」というものを切々と語っていると言えるのであるが、しかし、他方ではこの両作品はただ単に「古代ゲルマン的精神」とか「無常観」という言葉では言い尽くせない多くの問題を持っていることも事実であり、今後も多角的な研究が是非とも必要であると言っておかなければならないであろう。それほどにこの二作品は奥行きのある古典文学作品だと言うこともできるのである。

※本稿執筆にあたり二作品の原文及び現代日本語訳はそれぞれ下記のものを用いたことを最後に付記しておきたい。

「ニーベルンゲンの歌」

Helmut de Boor: Das Nibelungenlied. 20. Auflage. F. A. Brockhaus Wiesbaden 1972.

相良守峯訳「ニーベルンゲンの歌」(前編・後編)岩波書店(岩波文庫)1955年

「平家物語」

山田孝雄校訂:「平家物語」(上巻・下巻)岩波書店(岩波文庫)1915年

中山義秀訳:「平家物語」河出書房新社(日本の古典13)1971年